

續詩合類

二



須賀通
舍之章

續 宇合 絹本著色之五
太皇太后大進清物御用之金

題

佐藤

寫二

梅二

桜二

前後時多二

纖女五

月二

絵葉二

雪二

惡

虫蠹六

予人

足見

金

太皇太后御用之金

吉野弘隆藏書

續庫



前紀伊守雅重

或弟西友原靈感

刑部少卿家基

也房大輔

あ越は校守資隆

前少將重綱

右

信後惠土

信顯昭八

入道宣仁七

前馬助敦頼

侍従師光

豊後守賴輔

信祐威

判者左近少將通綱

一義

元

信惟綱

宇久ひとのよく五代わゆうをもひ
の風よを乃らうとむら

右

信後惠

書かねうてあらへんわえよ

ふりうて病やうめん

たぬきよまくわせばたうへ

よまとあたへとふるうりく

うみうんうみうんうん

きくうううううううううう

二萬

難重

すうじはうううううううううう

我身へ身をもつてこそまを

一萬

左

顯昭

せんよをのうとあうとえうし

おのうちうねうくうう

六九奇をなうなうなうと 太字の句

ハトハトはふねうきとくう

もまうも勝とやううん

三萬

左

右

清勝相辰

あくまのあくゆううとすむ

作すし翁のあれううう

右

顯眼

ももくらうる玉の口にし被ふと
酒ひの柄のももくらえ
たもつひうきつう柄や右にあ
そくうち候されともわん

口鳥

左猪

靈國

虫の毛ひそむ柄まは國うへ
柄乃よりひよかくわられて

右

顯眼

小虫よみ移ぬの席よづりとへ
柄そくあくらそとへ
たもよゆうなう右あき合方へ

虫

左

家基

白あき合いつきの柄もくらぬ
きうちも下りまことかすじ

虫

室に

柄乃よれとくはなとよきよま
もどえとをうらまきよま

かたもうかとも云つてきれども
さまでうまれのわ

六事

た指

折重

物乃花かりてうきめも二月の
もえ衣よお月もありき

穴石

新穎

時うね白花とくわくとく
うみれわれうらうらとくとく
たうらえあはわくと

七事

清勝組

からうふお席外のうよ白
花のトコは竹てせゆん

九た

顕昭

うねこくと竹のくれと竹
ひすひと竹のくれと竹

うきうれううと竹と竹と
うとうううううううう

ハタハタハタハタハタ

八

九
九

世說新語

くせむはすまうきさうん
およそらひのうとくわ

七

所
考

あくまのふを筆あせは
あすけにひきうきのりそめら
こよなくほきよどりて
おはまくとまくともうへきれ
あくまのふを筆あせは

九思錄

れ
わ

清初四家

はぢからまゝうそそくおとて
ちのものとおもふあよき

七

卷之三

あのふよこてふ一とくともうけ
たるふよことれとよよ

九

おととしもまた

病よりやうんに付あわすし
それとよきまくまく事へまし
すま／＼たまをうすすう／＼徳
云賀陽流う合通後は云々^ト
うくてアド内もくもくてりきと
ちまきひめら／＼ねうきうじ
の／＼ぬ／＼叶此經度能不國
難丈多難ムシ又多と達う
あへ在れ

十番

せた猪

俊惠

よしのま／＼をほま／＼やくま／＼
ゆふきて／＼うれ／＼うれ／＼

右

顯昭

花ソリミヒタマハギ／＼モミタマソリ
アラシ／＼ヒトクメヒタマヒタマヒタマ
ナキユ／＼ヒトクメヒタマヒタマヒタマ

十一萬緝女

内膳

俊惠

セタノ／＼ね聲りとま／＼

古
標拂

モ乃らシテシテシヤセタモ
中ノ神トウシテスル

十二支

た

資澤

様セ乃レシテシテセタモ
ムのシラヤモシテ

右

脚立

セタモキムラケラ社のシテヨ

モリタカモカキシテリヤ
十二支

た

大脯

彦是乃シホトマツマウラシテ
モシシテシテシテシテシテ

右

頭脳

さもシヒタモシテシテシテ
セナシシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテ

十
右

十日也

た

後患

セタ乃ヨリレシシのキミトモ
株の白病とまえしん

太

頭脳

姫へくともうも中とこうりう
セタにりうやされうち

十九日

清惱

カリヒヤキミのひれひそれ

十九日

ね人乃神もゆきき
心な

新歌

セ子もあすの別をうきよ
あよむ神やうりくちく

た右とよみかわさりく

十六日

清惱報良

とくうひえいもとよみかわ

おの本とうまくあらき

石

宣に

待人の内へもあらずへとけりと
行はぬよしのほとすゑ

さうようとおりゆどまくに

十七あ

清愁雜記

雨をそぞろとすておととま
おうりかづくらわれ

や右様 新頬

山乃くよまれとこうらむのまへ
ゆくし月不うとまされ

十八金

ひれ

賀澤

る方此月の桂乃うちのうを
極とすとくとくうきうち

右様

後惠

とのうあわうすむりへとれよ
レうをかいと極のうれ月
た取ひうきしとくとくとくと
れあきねまよいとくとくとく

せんとくとくとくのふうとく

さうもんうれゆてゐ
きく

十九日

たけ

大物

うちぬれのうりよぐれ
あきうちあとて月を

右

獨浦

緒のうれぬ神よ
ひよううれふちううれん
うよあくわいあくわいれ

今すく伺うまされへあらと
そわともどひげ

廿九日

たけ

精重

緒子れの曉つるアソブ
月子れやすに白の絹をあも

右

宣仁

下溝あくみとよく經

け縄のちれうすぐらじふ
れもあくまくあれと

吉川

又をもくとせりかと

太一也

た猪

活物

小倉山あられよりらのれう年ハ
子のわ

太

後恵

うくあまきなまへうるあす角
ゆらきはらま形きよきり
うめにうくまく

太

文

まこと

たは

サニ高弓

た猪

資清

あき乃まくまくせゆよをぬれ
萬(アリ)ほの衣もあきを

石

室に

花もくはるとみせそとあきを
花もみすらけとくとく
うよゆくされよも太い肩と

太

サニ高弓

かた筋

ムシテ御戻

宮ぬきみあたのふとやもうすれ
様ひうよをうちううけり

右

宣に

花乃まくらは拂まうじ
ねのあそぶもくらゆる
たおもあくの烟んすとく
さわ右へ下をそハゆ
もしもも

手

木写

た筋

清浦野

事うさわうくもじとやうくも
けくまくをかひひせよ

太

後恵

天うすいまくもくもくも
花乃まくらは拂まうじ
うよ優うれとくらのまよ
てもうすり花もおまとも

手

ひえん

サヌア

高基

西ううんほも様とのやりあは
くふえくもとうきとたよみよ
右

附え

秋あくよ里よしの物うきは
うそりがくらもや人の行くま
左をかどわりくらもをあり
サヌア

右

後恵

西ううんいのちと竹よやうとま

ほまれうのものをみとす

右

頭脳

つきもうまくへ里むとくきく
うきうかくもうふなをあひされ
たうくもあまれもあうく
てたすとくやく病をうち
くもととくもととくひて
きほんきうひねりとくわゆるこ
大ちあ

右

被重

我處をとどき乃入にのうじて乃
かくしきうても年とすま

在捨

新頬

我處をとどきらの宿をま
かくしきれとまくぐりゆく
在四角うちてすまくわく

大八事

な

後惠

わまたよをとまくもの様を

がまのうじととんですまん

在

敷鞆

娘タよかうる座や坐まん
あけままするちとまくまん

在

ひき

大八事

な

後惠

君やあみ我處やうねりうれ
きのうとまくまくうりゆく

右

類補

至りまん氣うかまつまくまき
人よあひ力とうん神うよ
たうくやわんとあひゆきと
もうきとうれうもあひと太
ひうらもあきれも河とと
欣喜

欣喜

清愁

心を病て病も病むく物を
病みぬるよまらそらのわ

右

後惠

教うて年へやは力へとけうよ
せをうそとようひうきう
去らをふねもううとえすれ

右

新重

しよじよきもううとちを夜
物うらうのゆくもきて

右

宣仁

せをともひとせす。我のひととく
もものよきふわやくちうきり
れをうすもか。たまて寢よあ
や

西宮

れ

教教

いはとくじりのよきはらうみ
者も老とあけまではせ
太翁

室に

かくもよしよのゆす松風と

さようれのうりうりとけつ
さよの内りもかうもそれと
とすまつまづまんと

西宮

れ

云々

人ねよあはうるもひよ又
との宿よもうちせう

れ

肝

はせうすかはくまくねう
はせうすかはくまくねう

卷之三

欣賞

九

家基

世のうよよ体のうよよそれ
かうよよももうらうようよ

玄
指

微風

あらひあるよひすうそれとも
ますよせむをもとめられぬ
そようよあそれとおもふ

古文真義

七八

新
文

あれかとあまねの
わくねともれり

古

清肺經

今やとされに可と
ふのよにひづるか
ともよ祐めこ

卷之三

續歌合部類卷之六
平經密家歌合 仁安二年八月日
題
草兒 鹿
紅葉 痴
詩人
刑部口皇家胡
赤少口口皇胡
赤中務翁李清胡
宣太后亮頌捕胡
不芸庫類類政胡

右宮亮經慶羽辰
太常不進情通
不共庫額相改羽辰

卷之三

前少納言資淺

近在りの有房

大東授史師光

文門檻外有修竹

中務少輔宣長

日有往空視威仲宿

序言
卷之三

佛阿闍梨口授

大医精微入道

亮云齋

卷之二

三河 大廠女房

小竹枝 大文女房

判者不宣太后文不大進故不稱補羽長

一
卷

九
十一

詩

刑部之章家胡良

夫とまことにそれぢやおう
あはれのたゞしきはりゆゑ

卷六

希少翁吉慶年清隆

秋の野　せいにほく　かきふれ
まぐすく　こもりうみ

卷之三

七〇

の松乃白太守じよひ白き

心事すすゆれまうへんをす

うりいりよしゆとしてあ

あひわく定年

二事

た膳

全亮經塵羽長
老とよもじともくも
らもちをうじてよむやをあきふ

右

あよとくのまの弱よしとりく
なりひとくのゆかづく

えにしう日うはよひとお
きりほうとよとよあね
つわきよ達たまはた膳

三事

た

たをお原通膳羽

女郎老はよとよてよとようえ
いはれ玉このあてよとあくよ

木太膳

小鶴尾 おま房

百姓のあともよりありえん

まことのうかと申すまことに
たあらじと申すまことに
りきまのうすくさんと申い
まくはりまくはりと申す
まくはりまくはりと申す
よそをさんと傳へもありま
ちがますとあるねに腰と
さん

足音

足

布守湯と蒲原家妻

ゆく人を地の尾とすまゆせそ
えうひたするおみゆくわね
太脇

在井家妻

喰れりとすくは人とまとひけり
いわ尾とすれりとひきりん
たとひりとすれりとたとひの
とすれりとすれりとまことの
ひもとてこゆれり腰とすれり

足音

足

室太脇家妻

様の跡は今までのところあやうれと

森内山へはまくのとれど

不勝

市長庵は源氏改鄭

ほそきよかがりてあらん松の木
えちととくとのこゝにほしれ
たうちうきとすむかめ
とあくとちりきとくゆす
ときてひいじはらうきとす
とせね勝とす

六書

瓦

大東櫛更津源亮

しりよひの肩にまぬか郎先
うちかくえのけりとあるよ

コ石

日吉祐宣源ア威

女郎ありまのひよとみゆ
ちゆまくわざわざゆりと見
たれづくとくにたりたれづく

やれづくはれをほほのひよと
ともひきりとんそれ

うまきこすかにあらわされ
しれ小山はさりて下アシ木
さくらもとてゆりもとて
よしとてキツネモトテ黒不
あやまつよみれ八勝

毛中

七

尾脇

不そかわ深有房

ひだりれそけんがわいさけ
くぬいも小

太

中務の翁之長

そよご形をもとめれ
いもりうして身をもとれ
たるくよもとてゆりあひと
ゑとひもよううちす
りとりひかれまゐる
るふくいとて下アシ木

八

毛中

頬脇

うはちりきの室よりやあら
らうりかきあらとこううらをす

太 登蓮

ぬの野れもすくそむそむそ
うそゆいうちとあすれそそ
た山あそとよまひあらそす
ういもぬりそたまやいうち
は身不記下ゆる事よせば
ノハリきわんのすとせまわる
みよとだよゆくよ

先妻あく津よどじし曾
詔ふ山河海をしじま山ば
じとゆるいとゆるまれあくそち
きのあやさりいりすり秋のん
きのうおほづきりゆくと
りえとたくとくとくとくとく
月とた意處詩とくとくとく
もううとくとくのりやれ歌とく
もううとくとくの年

たまへこしりやくとくうりえ
たんとおもひわれへとく

ゆうりやく

九書

九書

如扇ふつりとの社、人をえさす
神分の事

九書

太馬權が痛筆

らしくて雨のぬるさと
行き一うする。如扇むる

太

九書と其てトキアレ乃石房

音はれん半といひて又伊弉

音あり。又水木やううり

音をひきらはとおそれて唐て

トヤ

十書

九書

阿闍梨心覚

いりくもゆてけす林業第
えりあがりやうかの事トおそれて

太

太馬權が入道

富

不れすまにせのまへまへとさく
うちうちのふゆのまへとさく
たゞと初とちよとさく
てゆき

十一書

瓦勝

俊惠 玉圭

りきしてはかと、高まけられ
そうそい、天のとうこ、
太

參河

大坂文房

林乃野、主君の元のところと

うちりりいよもうておとんれ
たじとつひりやくよ
からうはいあまれとよる
くがり、あすりともと
てんおえ永二年四月
歌合よりのをひりと
といよも志りんとゆれた
よはた勝也

十二書

石室太白集卷之三

りやうじりの花の下す
地のすゝめにむかひ

太

たまご入道教養

ほくの枝とそとへ立てま

くありわらわらりもん

不石今集ありてみたる

なへき林の枝とそとへ

とくら白鳥と云ふ

一書鹿

山

重家羽衣

太

鷹頭羽衣

辰一鳴鹿の弓うきみゆき
うちぬきわらと和まの弓
たまらしと多とがく侍より

宮あらとすすりと太さりうち
もく傍見ハナリは生やう

とやう人もありて えに花
山す会もとひれの僻生上
をあじとて わくまくらひり

の

二書

凡

勝

通能明居

やく度と身行し林の夕景
ゆれをもよおのときよ

工

高歌

けよれややまの唐の音

よしらきくせうづ
たともくまぬよこづよ太
のむすよと車ととく河
と下りゆきりよよみ
よしよきよとそいと
りきたはりゆとよられ
ゆきれが勝と一

三書

凡

勝

賴能明居

北

勝

賴能明居

太

頬脇

おもふすりむかひくとちくさう
ゆきくよーのトトとよん
たあくいよれくぬ
ちもあくもとと有能
御一家歌合はや様と鹿の
ほとこよルとようらちゆ
すにわいやれはま二弓は行
カキまことん脇と下

里音

上

定家

小男鹿乃をくもなすよすと
なみすら袖

太

勝

重臣相

山あるくわうとれやようすん
たにこ優弱都のうすき
のうくわへせへよきこゑ

とゆり床のわよそありま

ひくひくひくひくひくひく
ひくひくひくひくひくひくひく
ひくひくひくひくひくひくひく

木暮

山川

二重郭

まくらのそとめられぬ林のゆく
はよとくさくや宮庵のゆく

右

信浦

廉のねれよすくゆゆゆ
りよしやとのうたちこかん

たごのねはあれとはうち
きくと神ぬまといひ
うそくかくよする奇しそれ
ほえぬこのよけにけにけ
りあうと源とよきれてゆき
とおなじかほくちうきてぬ
ううあいしやとのうたちと
ううあいしやとのうたちと

物よりゆきりりひやうえ
すましはわねと齋会す
お漢子ありとんあすのす
なりんを拂ひすん

六事

た

資隆

まうれのうと所

太勝

金蓮

ゆくの主もよし也

ゆくの主にけやくも
右ひよふしつすやま
きれゆくよ尺て下工
くらむくまくまくまく
まうれりくよまとくよ
やすみこゆくまくまく
月とくすはん朝れりく
やくひとくよくまくまく
ちゆう会かくまくまく

「女席衣とまくよもる
いやよよかよひよくうと
どもくくりとくと御
ゆふとおれいれく年
はかくくくすれとお
端もくくらきよりく
多
たお
鞠波明光
ひれえの男庶士はくと
とほきく忠はまうまく

中太
枯の葉を刈りたとく良や
竹の下よか唐の木すみゆん
ひのむらろくちやまくさ
くくみゆく
人文字やわうくいんこれ
遍身病みてわち仰天よさ
れどもこのやまくわうく
うちれお会よしもよあ
りふるわうく

身もすらうへにあつて
も訴ひきぬよりまやと見
ゆふこのお肩よさくらさま
れぞむる持

八書

た

師光

風すきよありはせのまゆ
福原すきよかく應りありせん

太翁

室唐入道

ゆきせん新ねりりそさん

よしアラシホホのゆづれ
凡有尾りりきこちしかま
カリカタリヒ鹿りりとハ
ヒロのミ江やしてえくへ
リテのゆき大浦よきもよ
きききよきこゆきてあ
ハねがる持

久義

た

伊行

秋の紅葉をあれどもじとて

月夜の席のよき人

太

有房

月夜の宿すむ秋やそれも男鹿
床のゆゑて、うらとよきもの
たゆくとゆくと伊豆弁
乃音より林床とまの枕よじと
あ葉さらりくりの夕とま
く重とぬきしりとえ
ゆくりとあことことを
うらへたれしゆうじ

はよくめりうそおきてゆうえ

十毒

太

春河

ちもつづくとまの枕よ男鹿
うるあきてやちまみん

太

小治

きとりうそおきてゆうえ
ゆゑひそよせひととくわ
七月のあくととまほひ
れうり太められゆきよ

今そぞらうそとしもひき
もととよすともねへと持

かみてゆぐ

十一番

改平羽戸

さくさくのむらに春とまくゆる
山あたよおちとほそすりう

太脇

四荒

せよそれ音のまじれぬ
とくわくとり林の声里

たそよわととまくゆとよ
やういわらふわら席乃ちく
りんその半弓うららと室よ
あれりとりわうとう
は席つまもしてあくこく
ひよく人一ひとよてかく
ゑよまきのまくはよおれき
庵あいとまくあくわきと
てまゆき

十一番

ル持

後惠

ゆくゆくゆきまくらるるようちく唐吉
くうじきうそとくわくわくわくわく

太

玄武入道

と皇はくすりゑいわう唐のあよ
さとわくふとわくわく

たまくらくらくらくらくらく
ううれあも太のやうりゆうい
ねうてようううううううう
うううううううううううう

一月

たわ

皇家胡

月きくくのううしのううう
まみよ下うれれれれれれ
不
胸政胡

のうううううううううううう
ほうほうほうほうほうほうほう

たよのてのせよひうち
のやまととりぬれりしる
もともとつりすちよひ
の言のすりきよんじい
うりとふもと一かまのま
よもく力のさりのそな
きもやうけくまくとを
すえられはんつりをも
りとたの秋のよしゆう
しゆきよとさんねといれ

二義

ともに

た播

経廢明

精とゆゑの三やく清とちよ
しゆひのねそらしてとくん
太

參遠

内シケのりくすりゆくおと
ゆりいとあとと清やくすりん
立豐山の清りゆくおととくと
内白やとくやくすりさんと秋

月の雨あ云がれを歌ふと豊巣
彦教事とうりくせられとま
えれはよう月先どりわとま
月とすりえのいとまよ和
てじそさんくすりのやれ
おとみてぢんこすりよとま
わくまれと月のいりとま
えてすりぢとやかくんとい
きんまくとれそすやんを
そくゆすととじりむれ

三毒

尼

參

れまわ／＼角あま月とすりれ
せんれまの月とかられと

太

乙童相

月をくみぬとすりてま
くみぬとくみぬとすりてま
天にさりあらじれと我有
ふやさりよす冬よ我有

の身とぬい月が身す節
身す月す身す月す身す月
旅の月す月と身す月す月
身す月す月と身す月す月
よまの身す月す月す月
身す月す月と身す月す月

星

た勝

後惠

月きりみひのうねと下さじれ
いつはちくにほれりる

太

通鶴羽

くもとく月す月す月す月
やまとげしもとく月す月す月
瓦くもく月す月す月す月
あくられゆく月す月えと言
まきは言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
かの言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
身す月す月す月す月す月

皆もとやます合計よりは
あいさくとこゆたけり太年
じまとありてみやどんが
たや清ひくさん

大青

た

李經頭

よすまよぬきりとるれ
えくにり月ゆと足され

石

勝

宣清入道

いそね林と月力りきさん

ナリとあし蓼乃重すくわ
たすくたてよをからくら
あざれく太の脇とゆ下

大青

た

高銀

よのまのまうくわ新見よハ
月アリとお天のアリと

太勝

政軍頭

ありさくともよもよもよ
力もこころともよゆりす

右角を以てとまくへまかね
左角を以てとまくへまかね
半たうひうちすうすう
たなよとゆとふうじゆ
すとせかどくあめを
下落居すや

七毒

たお

小侍従

左岸はあじよみの林のよ
月は淨すきむすりすり

太

仰光

さ東あらえよとゆくはま
あめとてぬゆきのよれ月
左岸樹病のうつすやう
ういて三句よ、物の字向
うれきうちに済会もとよ
半也太よ東と云ふとあ
中れもあまさまの左病を
たちよはれ补いばれ

人骨

八
卷

九
晴

定長

月と月と月と月
月と月と月と月
月と月と月と月

九

仲行

月ノ下と暮れと朝日と
秋のよし
まじいものとそよぎと
木
伊行

九

四

九
毒

10

石虎

卷之二

۲

六

卷之六

て右角とほのうへりくノ御けと
まくこの流りよこせられ
たち林のちとまくまとゆ

れいとよとよとよとよとよ
太石律院

一斤杜澤水半斤太陽火

十卷

清浦胡氏

とくよしむかわせれ石を
ねぐらまくして月うね

大略

心
竟

あくびのあくびのあくびのあくび

まことにあらうとむかんえなれども
たゞさうすがゆめにちよともあり
ちよともあり

十一

卷之二

明
1412

北風のあらぬ春風うつむく
入道雲の月

七

鴻臚司

月ナメのアラシアリヤレ
ヤムナリナリモモホシトムニキ

月より少しあがめぬ
月より少しあがめぬ
月より少しあがめぬ
月より少しあがめぬ
月より少しあがめぬ
月より少しあがめぬ
月より少しあがめぬ
月より少しあがめぬ
月より少しあがめぬ
月より少しあがめぬ

上勝と下

十二書

元時 賀陰

白うじとすくもひそ

中月とよりすてにすり

太

大支入道

りきとれ

耳の

叶うきりとまみうりては

やうにわの月とすのくらみ

やすにわの月とすのくらみ

あとすくやねをせ遇晚雲と

じと書くゆれち林うりはる

あれ月のくまやけの月

はなへてうへりされり

うのとほそにあゆくま
すりおほきよのとそく

ゆ

一毒 紅葉

瓦勝

宣家明月

やうすやまとわらとゆる
かまとすゆり衣われり

太

優惠

いづるのあせりと立田川
りくらわすとすとすとす

太

優惠

太

優惠

二

優惠

太

とくに渡ゆこうらよま
をてやさんちあめどりき物
をのりのりこすりきりかと
よううすすいわおとまわと
よりよれこむとすれと行
た勝とやかみん

二番

た宿

絶巒羽衣

杜さうのそえよみあひま
ちらり

太

頼政羽衣

紅葉うちうらりの山をとどめ
沙とすりんすりんすりん
太彦羽衣若葉あかとよ中はる
くのくともまくといふうりと
なりんちきす。あひとまきこ
せす。とまくケキあれ勝

三番

た宿

鏡取

それよりのうちのまことに

ハシマリトノミツタリ

太陽
下經
資階

資陽

初
されうへは里とまくら
みくらうへがりまくらう
んれまのうらうのまくら
いのどうとそりあむせ
まくらへんとひる
ちまくらへんとひる
くわまくらへんとひる

ノ哥と子の死後才もと氣
勝る事とぞ思ひゆ

口壽

九
勝

賴爾胡氏

卷之三

七

通鑑

志士不復生也。而知者
りうとうとく。かやく。神事
んぞう。一。かね

ふくよみてとこやか万葉集
はくはうめととくとくら
をとてゆとくえくわく
やくわくとあくくよ
くわくとてあくら

立春

元

考観

朝日

のあす

ぬくとく風

太陽

外光

くねまの角のあくわくと
背のあくの神をりくと
たまむ半わくとくと
きくまじくとくとくと
みとくとくとくとくと
のとくとくとくとくと
ゆくとくとくとくとくと
ゆくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくと

もやれもほのもとうも
むらりとひともあす
とりれよまとひるそり
よまゆまとかりとも

みゆき

六書

た勝

二重脚

山ひくはる葉のけしてどうぞう
うちわせいそ崖乃脚うり

太

双車脚

さくねはる葉のあうゆうう
よひくすくとくはひとく
あふくとくとくはれしくとく
きいとくとくとくとくとく
葉のわくとくとくとくとく
わくとくとくとくとくとく
すくとくとくとくとくとく
すくとくとくとくとくとく
字同えれとて歌病とよてお
うと音節と合へなうううれ
ちもありとうぬまうもありう

りうくにすよとおきよてま

あさやひすとともゆくめよ

りそとくたちよみがんくら

くわく下

七音

たる

定去

びうよじるふまよりむ

らのほのほのみこします

太

季経羽

えよどか風くわく高い

うしゆく衣ひりま

たす牛竹一丁冬

うすや太文湘語ちてつ

八音

たわ

伴行

紅葉はるか年よしゆせ

太

小倚徒

くすゑうゆくゆき

ゆきありありやうやせても
たおともよふ事とひをもと
まくとよとよもんといへるのと
いきやあらへてまつり
いきやあらへてまつり
ゆきありしゆくよまんでも
ゆきありしゆくよまんね
すれどもさうれどもあつ
きはくわゆくゆく

ぬ書

天お

成作

あきこりよまくらのわにけ
ようちばくらゆくととせりと

太

登達

あきこりよまくらのわにけ
ようちばくらゆくととせりと
をのとくらゆくととせり
かくらゆくさんああ朋夜落
舞月とよ月のふくとみづ
よもやからりゆくとくとく
きとくとくとくのとくとく
さくとくとくとくのとくとく

と多くもせはこうあるて持

卷之三

十一

九
腸

有房

一トモヒシテモアシテ
シテモアシテモアシテ

六

寶清入道

久松の川にあそび水をうり
久松の川にあそび水をうり
久松の川にあそび水をうり

かくもれを此仰りハシ
ヒトニテナリハシヒ
アラモトアヒモトアヒ
アヤマリモトアヒモト
アヤマリモトアヒモト

十一

九

清浦

君は今更に何をされども
我の心はおまへを離さず

七

太
腸

三

大井川の水をめらうりと
をみこしするやまひとみち
たがふとあるまよそよ
はよてゑやしときすうす
太ももとあもとの腸下
十二番

凡ね

小観

折ふくわくよしきれむる
こよし居りせやうきとやもん
太 教長入通

おまくは入日のもよもよ
ゆされまのまよもよもよ
たまうもゆまきよとじてう
凡めくらでアケミたる
所まよもよもよもれどうよ
おれとスルわくおまくと
えぬるよん

一書

穀

重文教長

りまくもじくよめよめよ

六

邵元

行
不
邵光

背もたれをぬけぬとお酒がい
れまいとひきの身とまわるの
うはうちよ御子はん勝さん
今まくらす

アラシミルカタシヨウス
人の子にハシムトモキナリ
太勝高親

卷之三

アリのチカラがれど

石川縣立農業高級中等學校

うとあとはお詫び

おおきくおもひやられぬ

三書

有房

卷之三

太勝氣候，多經胡氏

君の心をよしとす人もいる

九月既望，余游于赤壁之下。

卷之三

いとあらわす

江考

九

久のせとあくねちよしとれつ

あゆゆくとまどひす

太脇

通称太脇

もとうかせのうめうぢうれ
じき成よしむらうじうぢうれ
たわよ力と云ふと
もはいがりそれから、薄

よけまつよめうぢうれ
れせよあくと命と工とと
りうちのありうちもやく

あくまけまちうぢうれ

ぬじりあされん脇ゆりうれ

木麦

た

後魚

まくとううとえくみ我いのう
かくやくくくむとくとく

太

鰐浦御

我名はあくのくやのうくく
まくやのうく下りとくとくく
瓦洞

は仰り

畜

経藏羽衣

心ふせんふくもとをあけしもと

子てれすみと行いしれすみ

太勝

源庵

高きなりとし鷹とくはなよ

えりゆきとれいひ

たそめありさんづるまひ

さうりごとくやまくさんあす

了ういやまくやにとひのむ
とせらにもあれも勝約

かん

七音

太勝

顯昭

志はつまく、意もくよく、人をも
りいひく、心もくろとぞうり、事り
太勝

摺取羽衣

今下ともいはねども、君もりと
きはかげにわくやうす

元氣の爲めにあわいの
もとをうながされとまづく
よしとれときよ見ひては
すくとぬじてくのうち
けりかくまよしとそとも
うかくさくはされぬかと
うかくして多めのものと
たとうかくしてからよそで
とまづのままゆきぬいと
くらつてねだる所

八
奇

心元

りと行かずには船は行かず
しのぎのすうれりてせんせ

太
勝

卷之三

あつまてといふふくわをすの
みをもとりのよきよきよそ
たとうのすうわひよし
でくとくらういきよそようそ
のちのよそよそよそよそ

中毒

瓦

教長

わノ神やうすとひと後乃それ石
うらあくまくひうどもあき

太勝

伊行

ときあく人のうらは
しきの神とうらまほる

瓦といふはよしやぢよう
うらの神とお月のわく

けりよのうめえみや小

やあぢうらえは人のうら
ねにかくまくはれとそ
神とあよして多のくは
をすこすこりすくまく
かくは勝つきや

十毒

小治良

ものうとゆうがくすくは
かりじゆゆうりうらうや

太勝

柳浦

意めんわきにれどわまく
ねりせすわるひのそをまか
せれをちゆふとすひとす
くゆりこじれうりこりよる
ゆんりりくそひたまくわ
のひ

土毒

凡 晴

廢仲郎ト

あくは小ゆゑの川あまきえ
みそりとさりとまとうりゆ

太

政平郎

トトはとくとくとサニケイ
ひよやくれてねりうらで
たうくとくとくとくわ
もとまともとくわ
もとあわゆとくわ
りんちらとくわ
りんじとくわとくわ

三書

卷八

卷八

あすのとれんとあゆみにて
おもむろそぞをえどてありね
太陽 たまま入道

あすのとれんとあゆみにて
おもむろそぞをえどてありね
たぬくとあゆみのと
おとせんまはなれ
よき人のとくとほりよ
しん太うらくとも

あすのとれんとあゆみにて
おもむろそぞをえどてありね
太陽 たまま入道

卷八 庚午年正月書

養和二年九月十六日申刻書字于

以勅奉奉書寫授合流

慶長九年仲夏中角

玄旨

續譜合部類卷之七

實國家譜合

嘉應二年五月十九日謹立
高倉天皇御宇也

題

立春
更衣

九月盡

歲暮

後羽衣

祝

譜人

左

大納言隆季

左清門督實國

左兵清省成矩



前少將云室

前大進清浦

在少終有房

前少翁言實附

石以林密而得
權祿宜重保

赤馬助敷賴

右

刑部郎中家

前在京猶大夫鄭光

前皇后宮亮賴浦

右京雍大支賴政

勘解由次官親宗

前中宮大進賀保
中勢少輔定長

行是称宜改平

後患法師

誦師 右京權大丈頬政

讀師 右馬權頭隆信

判者 太皇太后宮前大進清浦

一番 立春

左

季 隆季

人ちえれありりやとまふとつて
詠きわうれやあらじとふ

右

皇家

御の内をみ立つまゆるをすとあれ
をそり水とくみもめせん
左右ううみわあてはとみま
けうきよしとへづんむすま
飛うき行とまみめりわれあじま

讀ふるへば、おもむきあくはまこと
んの、まへりとまけぬ事なれハお
ゆきまわせ

ニ

左勝

實玉

今日しのち毛、きあき枝ゆのひ
娘をみるやあうるん

右

仰光

一毛とぞうりひくゆのやまと

いじくふありてしきねうづみん
くらうううふかまくとほく
うりてけさうくさんとぢう四字
そとすかとれゆきよむをわへゆ
もやあくとよいじくふぢりてゆ
うかとをだうあんとゆくた
えくえおおおううとわれの傷

三番

左勝

成化

めにまくらもひれあくと
こりの夜の寝まとまつ

右

頼肺

玉乃月水のやりふはまし
のまじら水こうゆまゆ
のまじらうり

四

姫

云室

五のやまとまくとまくわ
くまくみやまよよれわを

右

頼政

免つまきまふはうらうらとまくと
まくわういきわうらう
たまくとまくとまくとまくとまく
ふとくとくとくとくとくとくとく
うち右ゆくとくとくとくとくとく
ちゆくとくとくとくとくとくとくとく
はしとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

五番

要んね

清浦

かくそものうそりみゆうれ
三福のねつすゑあけ

右

後患

まわらははまくらもゆく
羽のもくばまくらもしん
古河たるゑのとくとしん
やうらとくとくとてふふみ
りのゆなとあがとまくらとよ
せぬまふなとくとくをまくま

てうえあとれおうじじふよせう
うじとふくとふくとふくとふく
はあうれやとくとくとくとおうせう

六萬

左

有房

まひきりまくとくとくとくとく
りくとくとくとくとくとくとく

右

親宗

津のまくわうとせむけくわう
えやういもう始めん

たひをゆうのうそにうと右

右

七番

んわき田とも

資隆

水の面小ゆもくま風をまこと
去立よみかどハ

右

頼保

右はやくらゆりふ乃がまこと
きよとへもとれりと下
右あんやくくそくもあく行

右

と右えせふとすく又後うと下
左はももももとつときこうと右
人をねりねりうととよとよとよ
ゆくもとよとよとよ

八番

右

隆信

けづねの宣れりよれりすか
こくはやものこゆうすくん

右

定長

うやうれしとくとくとよとよと
うやうれしとくとくとよとよと

それまたいりてそのきのん

おちやくやりくもさよる

九番

れお

室保

しめうりやすへりとまう風了
むのうりとくしほん

右

政平

せうすくとあそられはまくあれ
治のうかし玉立あそり
立ち居うかとうりあれよまく

ひやととよとみふひくらよこすえん
とひりひくくやえうりうりうけいと
先だくせれやうよきとめと
一りうれせきとおとくねま
しとくね

十番

れ勝

敷頬

け波やおせりうりれうすゆうち
うねうにまへまへん

右

頭昭

いりぞれも度てあすうをとすも
毛乃うすとしゆかぎん
さんつとみうすもあすぬふあす
うすとみうすもありじうとこくとも
かくはくとみうすうじうふがき
みやとみ

一番　更衣

なん

隆季

翠りうる月の卯ノ日じん
あぬうねえけらわすん

古

重家

さくさくみう家とくさくやのもの
うきうねきうかよわもき
右月乃卯ノ日おとひ重家の四
年をとくすう年をとくす
家うとへあめをとくすうとくす
ともじんとくすれとくすうとくす
きひの家むくのくわくとくす
おうすうとくす

二番

せりひそく死をこうとゆきつま
せすふらまつうま

古

序光

ゆくもゆゑとくやれむ
とりわたりてまよひま
なあゆトロアリアリされ
きぬ古めしらうとて腰とま

三馬

成危

ゆくもようり、衣とゆまうて

あみけのうじとま

右脇

頼輔

斐衣えまへこうらもううりま
去ひゆり風ともまへる
左右ちよかくもくゆわとい
半よりお拾はよゆるすうり筋
色小毛いむとゆきくとゆり
もす今もりとまくとゆり筋
や小ゆりふいふ筋の白毛い
やしらん毛いとまくとゆり筋

に番

んわ

不室

ゆきうづら様のひもとすされ
えはきれとよそへりきら

右

頼政

今日やさはうのもうちれあくまよ
去り際し小町もうけん
左ひきくにきとも右ひやり
りへとくもわす

か番

せんじかくとくとく
印のしもじまくとくゆ下りぬめハ
きふ立きだりえうりうり

古

俊恵

立久きもじやうえん
をさくゆきあうもの役と
おだらううらもしとせうすわま
勝とみ行う

六番

んわ

有房

まわりよまわりとてゆきそり

右宗 親宗

むのよ小家とうめこもうちでく
みつねとうてうづま

うちやくまく勝つまくいふ

七番

左院 資隆

學みのむかうすと教ふかをひ
家ふまやとくねあしん

右

頼保

花のふ小こゑの衣とひふく
れゆきうなうすた後ふうく
れう升ふこそめとふうみま
けじのふかきいまくきうくら
人やねまむら方は後珍きのねあ
のうちにもうつをふたりとく
眉ゆくふ衣よ娘ひきうやうりと
うふうりとくめうも事ふにふく
うふうれいじくと右勝ぬ

八番

元勝

隆信

衣をひくふかうるすと
ものとよそへまわしてそよ

右

定長

麦えりく中ゆきこれまろ
あすとも西影よきり
んをくさふきもまどとよ
あくわしりりり右じきふら
まにの文字あしててよきこも

とて貞ね

九番

ん

重保

今日もまはうけの花れまよ
桜色とおひととてきり

右

政平

うらまきよハナリぬえらう
シ郎ふきのあめらもや
んすきふりとあはなやあきて
きもとく神うくふたて

されどさうまぬうりと立ち向ひ
うかまくよ心のすわいあるとや
あん文文ありとまとてつゝ下
もゆきすゑうりと右すふわれち
くとゆけり

十番

れんわ

敷頬

うよそハ死の後とらうりと
まわゆくしむらうとえん

石

僧頭昭

うよそハ死の後とらうりと
うりうねみハ今やまくま
名古屋小野寺とおふくらむ

一番 九月盡

れ

大納言

力のうへ旅もとくのとくれ
わきとくら身れ旅いあく

石

刑部卿

これよまくゆうり教よ言ゆま
ぐり月のるそひうそをきり

うすまづく角をやくこ石真
やくとひづりふ門もわふ

みか

二番

れね

右衛門多

されゆくとやじふはくらこちと
秋のこよひもすひしきれ

右

前左京権太文

左のきともものうりひとうすり
あくをくらんますとくとく

ら右やくときこもおひりの筋も
ものにもあすうちのわくとくす
しもくわくわくとくとくとくとく
とくとくじふとくはまわくとく
育ゆはくわくのうとくとくの下
かれ宿とくとくきこもおひり
やくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとく

三番

れ

左共清音

ゑうきりひよとあくまふじをひ
株れおうりはうりうりきり

右係

前皇太后文亮

もとてわじん乃はとてね
こうけうなとくさくら
れうきりひよと有ゆえまよ
とえわくれうとこれへと云詩の
くふわくととむしやハとのとく
くがくわしむしとひく
あくまくにりじのじよへま山

ハラハジセモとくよふうらふ
右守もあくゆとくとも筋ふと
ちととやまと

四番

右

赤少將

ゑうハく言ゆく殊とく先とく
御おもふもこまうりやいじう

石

右京檜走

株ふととくとくめらまめりく
こまうれもとすとくよふ

うも小ゆきますされとおはにゆ

とうへわらさんゆりうち

五番

れ

前大進

りうちとゆうこゆうともゆす
ゆあれふへうりくゆうり

石

太史君

今うそとハ様の義とあるもとて
のうれのうそとありう
たううそとゆうくもあじう

とそらもくよむくゆううきそ
きこゆううらに古すううけふい
くううそくつうのうそハヌトウ
ゆくま一ハ獨下

六番

れ

た次ね

やゆもしゆうりりりよれそり
縦とゆうふゆハヌミスル

右脇

親宗

れてりゆのうゆうとくのぬま

としむのしらみをそけり

をすとくふうじてゆふ
としむのしらとをふつと
もあまきよことやふうらよん
くもとよしきふたとつき

七

れ

あ少納言

右角へ猿れ行らんがくもとく
やしむのとくふとあ

右勝

お中止と進

きよよととふとぬけのそれよと
奴のあられはりとがく
ちよよとひりとわゆとやとじ
とよと右いきらをうはありけす
んくよされとよとつりと

八

れ

右馬權及

きよれ三とよあぬ秋の风くわ
ちよりやう秋のうぐれ

右勝

中野お宿

りぬとやじ小さうれをやれを
被うりとよくられあるきれ

あれせらひのまやくこくすふ
あへたりくわくられをめらふうら
八、内うちくくにゆるもく小まこ
ひよと一方よアももむなまこ

九番

ん二三 権祢宜

られてけびらやうひやりののも
みみねすすをこうりく

右第三 厅巴祢宜

をく月はまみやまううれもう
よ乃だくさいまふううす
おのもとまうねたくへいとも
我あくくの下ゆるくともう
しゆつとくはふしつともう
あれくしまる小やうくねらう右
ぐくにくにまれあやうともうの
ウセイドリくらううりむうき
と取やいあくゆもう

十
卷

前馬助

夕方とひの形えとまつり
うすはあふゆきとうりうん

右

寃君

まほのあめのまじけへゆふくはね
りむちてふのやまとあり

一
番
歲暮

h

手の内小ゑどりの水も

何處の里に枝升るらん

右

刑部卿

たへあくわん右へづひよひ
うふとひまくことふくまくとひまく

二
看

九
三

おれうよかきうそばあい

笑ひや何れの爲もかん

右

前元京院文

ときてりすくもあらじき
とくとくきふうわまへや
おほくさんひそり方じりま
すくすくわかれらはなとア

三番

左

明月とハまくかひてますれ
書ひよひねそかすき

右

前室太君文亮

喜てり幸せやさひなひ
老といひとあくふといひま
たことくにゆれてけり古モ
行かよゆきよん勝ゆと人
くよえま

四番

左

前少將

うれてり幸と向ゆへいと
秋あつり老くまとも

右

吉宗権太支

とのうち一つのかくねりとそく
とくらでまともやとくわん
んぢりまさへとくあもくとくえ
うこなとせうまさうとくとくとく
とくらでゆり

五番

れふ

木太進

りうにとけりやんりう
アツカウミシノコトえ

わ右

俊惠

行年にまかはんとまうじ
岸ハマ小とあらわす浅
たうこのまゆやうくやさうく全
りしかくの月、ひとかくに
またてゆきよまゆやうく方三日
勝うち倒れきびくとのひくまうと
たええね中をういらんぬま二万
きやまひあ

六番

六十九

右少将

かまふきへとらわゆりぬるの
とことしをとて書ふるよ

右

親宗

行きまやこみりゆとしむれ
一きくらわよりぬりうよ
一きくらわより二けいとくとス
すみゑぢくもきをにくす
とどおゆうぬ

七番

れぢ

前少納言

むもきく月りひるとくれふり
よといきじとひづくりう

右

あ中宮大進

うくれてゆりり年と新
月にかね祝身うね
むせいかね祝身うね
ゆりえうくわくわくわく
うくは今集にめりけんじて
うくいれりつまくまく

ううひのゆうすうやとやしら
うりひひそれこそうちの行
四そそく右あわししかねを
行わうそそくとやりを称ひを
わうそそく

八番

右馬權

右馬權

いうすれはぢじりとひうそそく
月にのそめれ三そまうん

右

中野か浦

月も日もすれくてあすゝ川
りすくあそやさにすみうん
名月も日もすれくてかわす
やまとよやだすゆうそそくも

九番

右五

桂林宣

やとよよなもやつふとおきし
身に使ふれてゆれくふとハ

右

はふと老てぬ門とくとく

政平

らをじよとよしとよすま

右もひつとうりんとうとゆう

小序り乃約すかとよすま

十番

左
んか

前馬助

のうりありとひがたふ書てぢ
むと活まねむひなうきま

右

亮玄

言ひてからくまひかくもまう

すれよれとらうげらん

ん方ひき公のすとえぬせを
様りひきもやゆくくもゆく
うり世古のすとひりうくまう
すとすれらねすとうりれれと
うりけふわうひり復ふれとへじゆ
うとまうりふそくめれわる

一番 ほ朝立

左

隆季

はのとに重しうじよとみれ

わしたの酒はこそそぞろくぬ

右

重家

今とはうふくびとしりひて
とおはらとおとせつてやへ
んりとの浦をゆりあふれと
ゆふとあら右りしんでひと
のむすみへゆきとしづきとれ
む街とゆきとひわづはうけもあ

二者

ん

實國卿

うひゆくえ行すとまつらま
わりてうすねゆくじは

右

仰光

えくわくやまくぬふれゆくわと
まさぬきたおつるをまくよ
んたくまくぬ右くぬふよ
くうとまくぬ

三

五

成能

うみうなれだわふとかゑ

まさらり神のうらわあきと

右

頼輔

ほりじみしまで玉に
あみとねそじう
うちへりねたをこも
神のよゑはめけとひすと
ゆゑりまつらをちりを
さきふとさくと右たとと
んく勝れとれら

四番

れわ

五室

きえどもわいねのほきであ
今ねうちのわとととく

右

頼政

わさよれはせりのほ
くかいかくやあいこう
るおとふやくをさむりいと
ゆりかくしてつまうりまわ

五番

ん筋

清輔

じくすくのあいだまぶん
てくそんへもろづりきと

右

俊惠

わけぬとよかくねわとよもく
ゑわやれりふとれはうしまー
ちうちりとせゆるとくとくを
おとすくわく脇とあれはるこ
くよすくわくわく

六萬

た

育房母后

これいえうぶふりをとんりのま
うつるものとせんぐき

右侍

親宗

玉はさくらまゆとくとかく
けのまおうづねさん
おちきふあくとしきこと

七番

ム

資隆

りゆつのくわづくあたりと
りくとも今ひくとれても

右

頼保

余わ々へれこのくれも待くもに
をそのまゝのうとともうれ
のうちんりわさらをふりと
ゆきにまたらねりあたし
とりいあふれりしかくともう
ふいのうちあくとくとくとくと
からすしもくわらたひくや
よそくにゆきをやくとくとく

八番

れ

隆信

けくすくねいしきりいれ
わくとしゑのすつに

古

定長

すれそめてあわ東とととおな
きぬふれりかよんと
おほ相のうす日暮あつは
やうすりとまきわ

九番

ん

重保

ゑといしれとくふあくいちくふ
きえうてくみちふのむ

右房

政平

みちゑのむととととととと
くれとくのまゆくそまうで
右右わくくもふいづりふと
右今りくわゆひあうアソブ
ふりふらうや

十番

んわ

敦頬

さねの河くほく神とうはれ
又神のうふ小鳥やみゆうと

石

顯昭

をさととらふあいねふとこととを
身にとくらぬふうわ
みねのまうりくにわるのうこと
アキラくとありふくふく
ワリしきりのやうのまよとよと

一
番
祝

七
十一

隆季

かみあをやかとのうへふわづの
ちききうとおそりよ

右

宋家

二
香

九

實國

二番
れお 実國
ゑくべいとろのよみれくは まく
くまくまでりゆづまく
右
仰光

自らあたたりへとすすむを
やうふ一か年

三番

右側

成化

ゑひのれいのれをひしはる
ほのまことを十すゆて

右

頼政

窓あめねりひとつまとくえ
れ窓のゆきくろくよ
れゆきくまよ

右

ひくらふゑ鎧にさかくらやま
やまくらんあらわれをぬま

四番

左

ム室

ゑひのれいのれの年ゆきて
れづふ石のゆきゆじま

右

頼政

ゑひのれいのれとすみひそ
けくらうとれとれやうぢりん
んひきりじまくわるみよ

有りゆけりあひゆりゆか

とくを勝て

みぬ

れわ

清浦

志とよよんのあんみやま
子代ともけねるやう

右

俊惠

若代と志といふはものやド
ウヒと三えをすらもあらず

右うちけとくとくうれえき

えね方代といひのうりそんいのうよ
そよといふてとくとくうれえき
やくふくよこうしきくとくとくうれえき
うわきとくとくとくとくとくうれえき
てやみうき

六

ん

有房

ハ少へつてゑくのね様よとせり
ゑくのあらわうととかわん

右

親宗

君代へやにのちりり立候乃
おやふとせのたすくをもん
むちいふとをふるをあくも
ゆうとあらばへまともあ
くと、れぞうわらわらわ
あわもじりとあんとくわ
もきにともわりをすとやさわ
るをちい寺合乃くとくぎれ
らまも勝下とくわも

七番

十九

賀隆

春の流れいねふゆうゆね
だらうりよみゆうゆうて

右勝

頼保

ふとせゆうののかつてかくギミ
ことやとのあらわい
むちいふとくめうくとく右
せんつじくとくくらくくわらう
くうふとくわらう

2

詔を蒙る事あつて、まことに之の
教みどりもあらへず。

右湯定長

定長

九
卷

h

志はわざと仕事の多い
うつしもとあるからこそ

右
後

重刊

右 侍 政 平
志 と き と く そ る う そ と く ち が い し
み と そ る く せ れ 月 み え ま
わ つ く し と 事 ふ か う う か い
可 事 不 宜

十卷

九

敦頤

りこ、

右

頭照法師

續哥合部類卷之八
兼實乙家欽合 安元元年十月丁巳

題

落葉 初雪 暁戀

詞人

无

大貳卿

李經朝臣

經家朝臣

基浦

李廣

女房 丹後頼行女

女房 皇嘉門尾別當房

隆信朝臣

李廣



俊惠法師

右大臣兼實之

右

賴政朝臣

寐念佛師 為業道

賴輔朝臣

小侍從

行賴朝臣

仲綱

子明

資忠

道因法師

清輔朝臣

判者清浦朝臣

一番 落葉

丸勝

大貳卿

ふるいし乃やみ日より説田川
れゑりうき一かほのものれ

右

賴政朝臣

あくしどもむかへんじて
全うれりひととがく下がん
たうちあくとむかへんちあくと
ひづねくまゆりはくふらひ
てくわく凡そえふあゆり

又モモロシモタマモトナレ
セキタマホモヤ

二番

丸勝

女房 丹後頑りサ

ちりの多一とおまのあふらりれて
苦れりしよ／＼ゆきゆき

石

寐念佛師

吉郎川をまなづれくいそくす
れあまはなうらきまか
ひきまともうりうん苦れり

ろゆくくみとんばとひうちう
てきらる石うすを今集小むま
れきれでこまくみゆくにいわす
きはやまんと云うせびとくぢ
とくもれきれとくれとくひふとく

三番

丸勝

季経ね

よもとくぬれわらりにけりうらまく
うあくよそとあくくらふとまく

石

秋柳妙月

ねらへてあ葉れまとちやわくも
りふせゆくうひうるれ

た方一興と有りて方ねらへ
とあゆまゆいより

は師うねらへりとまくは月のうき
えれやといあらへてもひづりう

とありもとまうとちえ經師候
田へ方れや又よど言事れあ

とほりをくううう下ととと
うきねらへいへし貫えり

うるのねらへりとまうへ廊々
かきそせんたれととせと
えきねとやうりけにあうと
いとくふをも事わらんちと
はけぬとこりとまうらうらと
うきのせんてらん待

四番

左脇

女房 皇室院の宮房

アレル古ふらのまへる角
をととれれかみとくよれ

石

小行經

五
卷

經家新民

庄川の風景
に波と風

右

まひやきをのふれるとさむかと
よくもうけたる者のそりこ
をうちられまゝとまのそうちによ
りゆりそひきくもふくゆす
ゆきやだらくにス绵といへん
ゆととそとソヘ寒くゆういふゆ
えりうちちうまくゆくにあ

しのむ竹はと紅葉はそのま
ちじめさむけこまきとすみだす
きたれをえ合ふとひづむむか
われをおまとてや竹さん

六歳

たが

隆信

女ととくわきれとすとおまと
ゆくゆかとれとくはううち

右

仲絶

左

仲絶

うへらものとくらとすれ
たうそせりまうくやうくす
うじゆうといにとくらきる
うちもとくとくらやうされま
もしもとくふねしやうじんが
くまくまうれやくしやうく

七番

たが

基輔

紅葉あはは風川とすれそれ
ゆまとつまみ翁工とすまく

右

子明

ゑくれてらるひすれとものや
りあはれのふのをくら
ひきは流瀧川をくわきこる
れとすくへあくくさうと左
初々ふくねとくくとくと攻
夕小豆はまれととそらあそ
とくとくめとくめとたかとけ
うう

八番

李廣

こ月川のまのひまとくわけて
ほとみきれえうそうり

山右音

賀忠

おあらゆくすりゆく紙れわ
きもたのこわしおうさん
をう心へゆくとわまへらうりかう
さうゆくとあゆりふなむちわ
くもうとれとれとれとれとれとれと
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく

はをのをもととのふまにひく
うすの、もひくへきよもく
じゆくやくしやく、うくはんく
うかはくとくもくすうくくい
うゆりやくわくうくらふくもく

九
希

後漢書

右
行

通同法師

御家に之をひつておれ
又をとよへもくゆへてや
さちゆりうきとえやううりい
うちひらみうちれゆふれんくふう
き方にうちこゝと名方をもめむ
もふ事じあれとこれにまうり
むりが年小う合ひゆうりう
うんすよよるのゆゑをまと
あとうくらもくとふうれて

今もゆくとそしむじわまを
ひきりやきしるスミのひれや
えさすとあつてまくらにえく
うきひもひもひらまくらとま
ありてあらねもあらむとけりめ

十番

七勝

右大臣

柱のやまくらにあまよみれ葉と
せぬねよのふくれうりきれ
右

清角右臣

國のくわわくわくく村あくれ
かくげくもやふゑうくす
たうちんわくく河ふくうく
けぬ東のえぐれうりれのわ
さいやうふと相模御のちとま
たうりをうつぶとくわいもせ
は取くわくくらとくわいもせ
えすゆきとくわいもせ
アモウシヘアリトクモウシカ
資通式のう合ふたびほ印の手

それよりかいかれまし、まよこゆ
じとすあれはひうちこすくして右
まげぬふやう

一番 痘宮

瓦房 別當

先づしと津をみよん拂ゑ了
ちよづの今羽乃と白鳥

右

小竹庭

めびるく我へ行はる月を人
いひてんとひそむ人

金石寺を下りて御内山を出ると
木門にけらむり石方も
かどり山内にともり又左方
とまづとまづとの庭やま
とあるが冬のくふとさりまつ
とせりふにとて初冬といふす
とくねゆりてお城ちゆともく
竹林

二番

瓦房

素面羽衣

りうてかと冬のあすに見るもこれ
まうちにうらみみのむら

右

精輔羽臣

あれうりりは月のうけにもくられ
そよごにあまろれもの初音
うるこうにやうきくふれうとれ
すくえぞきくれそてぬ徳を

三番

左

せ序 頌

今羽うりんまきん半ととうす

ゆえてうれふ庭のうくゆき

右

兼会法師

おれのうれうねととつ
をうそとのけこのうく
ううまくうふくうとめう
うふめうひうれてううれ
ううてううううと

四番

左

経本歌

吉野ふわとゆうねじゆうう

ありそひのうをきれむひち

石井 純
行

やうやうからうらの方ととおれえ
いはきくらうるもとす
たまきふねりくはくをうちうら
れ方とくにゆてもうれしもとみる
すりくわはふかうきのふと
もあうてひきうりよえくよ
ふの有うれこれは良きうら
とほつらん解すとまあれ

なんふ小竹

丑番

石井

隆信羽民

こひうれふくにとせばめじまと
かきくとくとみきともとのうら

石井

仲保

そひうれふくととせばめじまと
かきくとくとみきともとのうら
たまくはよまゆとくとくとまると
たまのうりうりうかのとくとくの

え、うちへこもるといひがたて
ええぞ

六番

たわ

後玉屏

先づじくすみよどやう野山
橋のねりあらそり

右

通玉屏

けはゆておもと細へあつて
すきりとくろし耶
たうへなづくすみそりと

あれは云ふと又みよとさをひよ
やまともきこにと音とくふ
花びらひらひらにうて
と葉やとうづれとみくらゆ
のまよとちうづれあくま
物もれぐるまくまくじ
ほそわすれとくらひとくま
けくわすれとくらひとくま

七番

かく

九

季度

霜枯也みり経色をもと深草生た
るるすらぬるるるるるるるるるる

石

資忠

むほりけふたはくらむくらむく
ね地うよよよよよよよよよよよよ
たてすととととととととととととと
ちよ右の今すととととととととと
ととととととととととととととと

八番

右大吉

初雪れあらわすとの猪／＼鬼
乃すら更れゆゑととととととと

石

清浦明臣

竹林うち経て下ましゆか
といしうもとほりふくらむる
石もあひ私ふきこえん竹と風を
枯れたりやうとあととととと
けえいゆすととととととととと
れい停まく下月よから不多

卷之三

うれいさあひしてほ

卷之三

九
香

九

基
构

先日はお詫びの言葉をうけ、心から感謝いたしました。お忙なところ、御心配をおかけして、心苦しい限りです。お元気で、お仕事も順調に進んでおられることを、心よりお祈り申し上げます。

九

卷之三

まよぢりの谷川のそとをまよひて

此處多一札里

たう森の花ひそかにそよぐ

もにゆくゆく

卷之三

葉葉一の白紙をもとめられ

久松の子は、

の事に各れはあらゆる

すかあねをきつづぬくれ

十番

元 終

大武郎

朝ましむれ入門とみまをば
まよてひるれすめこころ

右

松政卿

降官りひづね色ひるきうち
まよやもじせりゆりんとまん
をうてとうよ風とらりやせ
つをすのうわあれうりう
まよやもじせりゆせ

よしわらひとすくとく
ひきわぬらとえううそり
えのわらひとせりゆれらくわ
や雪はらひとせりゆれらくわ
事で今日もあらうかくいふ
すものうくはうとくうじる
一番 晩立

左

右六首

ほりを引一清れまうれ
まことふみのまもさあうり

石脂

活潑羽室

むろり度れ悪れ體やほのくと
明りくふろまの様を
をすはまりわくをぬふ／＼

二番

後患法師

えぬむらみてももきはまれ」
やくわくねあうましれ

右

通角法師

まれとわてゑまわくふかわん
くまきてとて承りあうすに
をちまゆふりのとくりぬあうに
まきなれととひぬりまわ
けまわれとソラからまくわ
ゆきあわねアソブやなうくを
竹にうかがうみてよどあ
あもととがくまうくふりとお
ゆきとわゆりとまでしてお

三
右音

三番

た

大武卿

多の日はあすいとてまくら
ゆりもくらかすまほぐ

右行

ね及羽月

傍のまと独り夜といふと
あてぬまくらまくらに
をあわせぬれぬれよのく
うううきゆりねれよのく
あてぬまくらまくらに

上石道銀母のさすや和やうよれあく
はまじふもまくらわとひよるま
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
すくはあてぬまくらむくす
ゆりあてぬまくらとくとくとく
れあてぬまくらとくとくとく
あてぬまくらとくとくとくとくとくとく

四番

左行

坐房也後

立あらずれととてそぞるいは
うれととてやとわづん

右

東令師

立あらずひとけよひて右
ねの立えれあきくれのえ
立あらわすれとがうりくそ
あきうらむとおとがうりくそ
スツレまちかんぢやねたを
立あらずれとくとくとくと
あきうらむとおとがうりくそ

五番

左

季経羽臣

立あらずひとてとてあきぬる
ゆきぬのものもひまくとも

右

頬拂ね臣

立あらずれととてそぞるいは
うれととてやとわづん
立あらずれととてそぞるいは
うれととてやとわづん

六毒

たが

経家羽戸

身に附れてもよまざまと
さすぬのありりあるの月

右

され

えねした筋えありきわうき
えれりとゆひぬつれ
た方へじくまひうふ
やまくまひくまひくまひくま

右あらはくとくとくとく
きくまくまくまくまくま
きとくまくまくまくま

七番

た

隆信羽戸

かひねのまやくとくとくとく
あれまちのたまつりすず節

石絃

仲絃

まれやくとくとくとくとく
うちとくとくとくとくとく

たまぢ事や 石をくわへ

うそとそぞりとよしむね
下よくすれども勝ゆる

八番

左也

基樹

あやしくあるやうのうりのうを
せれすすすもゆめられ

右

子明

ふりえれゆきとくと欲すま
りひみてううえとらぐ

九番

左也

季彦

ゆゑゆくこのせらうゆづくぬる
くのうらしあげくんです

左也

資忠

明ぬともまぬくううくまく
かくまゆゆいだれまく

右ひづらもくまくらと

十番

十 たお

せ房 別名

ちのちもと我そうのわうつまう
くまく人の氣をあすま

古

ナシ

うるさくうけまとう年月日
今朝のまんのぬうち下さん

年月日

かうへ後

羽のすふとせひりれ吃糸ハ飛劍
まきまきたがりまきまき石歌のこ
なまれそりやまのまくわらり

大略伺仰氣色不付勝負也當度付
本云
勝負翌日書判詞其後所付作者也

魚不存す合之候只爲比興以嘲諷
作者合之寂寞事也範中未入其境
之筆且為練習詠也勢不可取焉若
貽後代者必可招辱者也卑て破却
以示兩度會又以同前

本
安元元年十月七日

書写之

以劫本奉書字授合訖

慶長五年仲夏中衡

玄旨

續寄公詩卷之九

二十二寄公

癸未二年八月

題

用庭秋來

長精進應

作者

九

賴輔

維光

定宗
道清



宗因

本章書寫於金元

親戚

匡範是五年仲夏中所

廣玄

仲遠

仲賴

親基

因書於

癸酉年正月

有房

卷之二

癸酉年正月

六僧殿

卷之三

仲經
為廣

列覺

中納言殿

因惱

辨殿

侍從殿

奏濃

良賢

判者

亮公

顯眼

一齋 周庭秋末

た

頼浦

森乃葉すよ松の宿せますす
くらすれうり深山へ乃里

右

有房

人もんね蘿のあによ吹風
秋乃きふと吹よつうん

たたとどよやううゆよれのう
寝とまゆやもりうううう
右の人をみぬとしふけりの宿そ
つようく宿と庭のひちよもく
左よぢりゆゑゆくえ云れたむ
にゆくはゆくはゆくはゆくは
あ深か／＼古の木の氣あと
よてくじかくはわうてどうく
に勝芳やか／＼ゆくよく

二高

れ

維光

革三行ひへうりもう紀富よ
胡音あうて拂ひまたきう

右

心聲嚴

秋まゆとやとうくもうまやまよ
ちせうふけり在のと風
たすへ拂つるあうきとそりわ
うとひくあよまたうとけか
うつるや晉丹、我ととよまよ
てよりん

ぬむひのれさせひえくうじ
うれとうちかすれらう
なまきとあ会よれいそとくわとけ
ま右寺乃勝みえなひまくま
てよりん

二鳥

た猪

定宗

人なはりしきれまくすの西よ
拂ひうれとれとまくまく

右

仲經

さうしてまうじるの庭れ事
極とけよ森の風
右わきよもやもすほま
やうにやまとたか
たのすまとまよとま
かてめりてへりとれまと
有そねうよつとそとま
さのアカシヤとひを今すじふ
ひくやまみあれと右わき
うまもてやうくでたま

やうかとけり有すも
たまくらくまよ
四馬

たわ 道清

下うとよ蓮やまとじる事
極ひまつうりとけく風れ

右

まもとよりがたはまよ
わあれうちわくまよ

四まもおれりくらひまよ

ももよきの計へゆりもひて右
乃やちづれうらうらひあひうけ
こまよまく底乃くみのとえ
されひくとくと車竹をみと
もよかにふるよやうくと
ちあくとておひすくとくと
りきくとくまくしやり

五歌

たれ

家田

きのづくのひりかき稀すまわ

さひくとくふねくまくさり

右

別観

はくわくよむくいねをのあくに
一きとぢくわ風うゆ

きよ行うくわらねよとく

右にはくわをのあくとく
あのまらじとれとすしたよ
まわくまよ一葉らじとけと
そはくひすとくつまくにまつ
ゑなまくふうとれとて一葉

えらうともいひにまわへなか
らうておどと

浦川より云承事より本の朗誦集よ
うか題よつま葉底とす歌とく
待と送る中野之を心先我も林
日初て一葉落りめ見る みえた
うに候うされく竹よ
右葉どうすうとて此をめ
さへとすうちきれとまこと
よとあやれん人か見物の

まゆらにすはる一葉落とも候く
ほぢとてはせかひてとふ實
有らむるなり皆うやくん
六度

たま

親感

まゆらにすはるぬれまきし
うじの夜おうじよ

右

中納言殿

まゆらにすはるうる夜の雨
それともれのまゆらうる

右の事の方へとすととくよ
まほよとすとくよとすねと
まほよとすとくよとすねと
のすとくよとすとくよとくよ
うとすとくよとくよとくよ
よとくよとくよとくよとくよ
れとくよとくよとくよとくよ
のよとくよとくよとくよとくよ
れとくよとくよとくよとくよ
のよとくよとくよとくよとくよ
のよとくよとくよとくよとくよ
れとくよとくよとくよとくよ
のよとくよとくよとくよとくよ

とあゆてふわすりれうじや
おもむきゆれとたつしとけり
今すとくよとくよとくよとくよ
とくよとくよとくよとくよとくよ

七

れわ

主荒

くらぐすきれとれとれ
くわお風よひいくとくれ

石

因傷

通そくとせりとくまくの事
れのわづれいみまよきと

かうりやどにて みまのうち
のりよやくくゑふとそん

えよき

八あ

たわ

廣言

まくらのいんもうじに富うれと
をのほすよわくまより

右

弁歎

あきなれ翁の病よひぬを
きみれようすうれのきり

そよしらすとトヤマやまえ
いとすとくゆうたそり
りとひとゆとゆとゆとゆと
のりよふあううううとゆとゆ
のゆよとゆとゆ

九あ

たわ

仲遠

見ゆつりとまちけむる庭の雪よ
吹くもむかへねのまづくわ

右

侍従歎

いやれのまことにやうれむるよ
人をいたをは森のすさまへ
石より黒の錦のじんを無わる
めやそれへちくまといふくま
をのをとゆづねくまうすとも
えんゆくわく おおうすとてわ
とくづま みえれうんうき
まよゆく おひすうねくまの
うくまもあくづくくくくくまく
ゆくさん

十数

な船

仲村

まちくにをの陽芽よまくして
ゑとりするわまとたのち
石 美濃殿

日とくつる人よだにをのゆよ
立よりく れ林のゆくあ
きよわめてゆく みえなまの
ねをもくとすまゆのゆくよ
やくすれ半うすもゆくゆく

月の夜やうくうしよとす
よそそけりれおもせらねひえ
えぬとゆうすまゆはつ

十一萬

日
た

親基

虫のよきよしくまとほゆき
をすふ林はうとをりうれ

右

良質

とよくとうにあり室よか風を
きよよすて林のまわ

たのよきよに汚りてぬさん
一小森風をすくありくすむけり
萩のよき風あれの萩ぬきを
きとすきよみうてれりく
のすはすとくははきとてぬ
ゑじと追つきよすきと萩
ねうすへねと立してくわ
ねうてぢうちのすくれる
まひちくせりて凍は捨遣
折林上あゑ長枝う萩風も

やで吹きもじらすとあんれねども
さくうさくしみみた出れたよ
うりて草ぬまをのうまととお
ほきし半ちとよかくてかくく
けふ秋乃まりよひとくさくか
ら年太久ふねたよまくらと
よまれてゆれとうすくへをくら
やくさん

一
事
長
精
進

九
十五

卷之三

3

之
水

七

古文房

かくやかよのよしとなく
いとせぬきりよ門うそと
たうけにあらまこと
あんといふうそとせまうりと
いわうとくとく神とあんまう
き御神よとくをされいひと
おてがく一経とくとくあそ

スリテシヒトニテシトヨ
タレモリカレモシタタケレトイ
カレモタタケレルカレモルカレ
中れモタタケレルタタケレルタタ
今モタタケレルタタケレルタタ
アリモタタケレルタタケレルタタ
アリモタタケレルタタケレルタタ
タタケレルタタケレルタタケレル
タタケレルタタケレルタタケレル
タタケレルタタケレルタタケレル
タタケレルタタケレルタタケレル

うんぐのをくまもとあ
とくちけられもみあくふくよ
けくわれらうきてさきての
難よけぬあくすく

二

たわむらの
維え

日とすいもうとも井の水のよれ
なまくまくとれりしきり

石
かくわくよ井のまくみに

いくりくよ井のまくみに

重音とよみをもつてん

たすれぬよのうと脇このすけ
中よろけねたらへる。太の
じくりふらしひてられうす
じにちやまあれとおれ。会
二たとりたてまが歌ひゆねと又
そむきわらわとおれい
いがれくのまかくはらと歌
ゆきまくらまんの月と魚と
をあきてとせらじとらむる

みゑでとふちきれまきの
ゆうさんむせいうとんゆきと
くれまでえりゆうれなすよひ
えあよたのめうとせん

二番

たす

定家

日口といふよとくとすくせとく
ゆれわうまそわうまく

右

伴経

内みやうよの行よとよせと

まともねよよれおとくさん
あのよ乃はよとすんね
たまふもよしよひりく
ハされねづらなんじゆる
ひきよりことなれとち会ふ
つかましりえんふまれたま
つまも長精進のつまくさ
くわゆゑや

口書

五

通清

そもくせんぢりういわのあぢま
あもんといふ今もあもん

右わ

内廣

いづくはまをあひまつ
竹子不竹つもうく
翠葉はぐくよよみかわよ
まつまよりあくとやが
てまつまじくよらんと
のくじかわいよをすやま
もまもんのくよま

もやうやくまつりを終れ、又云た古
ともに十三日あれなうよ下はる
うつてよきよしとひづりさ
のまゝてよきよしとひづりさ
あらまじはうりてやせんを
あらまじはうりてやせんを
あらまじはうりてやせんを

立馬

家内

うつ事

とひづりてよきよし

右

列え

食もよきよかわ

ありのうらよすよばきよもや
うくい無うそりねてうけ
うきのうきよよやねたれど
みよせぬうちよまいのうよけりと
の難さうくすまうまねのうよ
とうてこのうもとくそくまれ
てほれおうとけくわくね
よくわく無うとけいふれ

よつてくせんたうせ

をあ

たわ

想感

いもく門出くまもとすまも
西ようわとけつづく

右

中納言殿

なれあもし往そたんの居水
いり井の日輪といくひと
とくくよそののけられわと
ゆゑふみちうもきれ有

うらうりゆくすまうくわゆさ
うん右なまれありしやどとよ
うて、ゆきよひきよされ
うちまとあれもかつて
ゆゑゆゑとわくや

七

たわ

匡胤

事あらぬかとてうかく
もくらむとてうわわとん

右

周易

百トモテリトウヒ縄よソ^{タカ}
あられまちねれつりねと
たじい升のうめうらもとてしと
つるともやとあはよ乃
とくつひとわりくゆくねと
のあらえまうねと云半にし
よもろくね半身てゆくよ
うちのけくまとくとくう
れまうねとソ事へち
うらりゆきよとん浦てゆくは

うちのれよ乃くまれゆ
いよ在体^トみ云れりか
もまくとてくらむけしキヒ
きよろく小聲とあれとえれ
と祐のうとようん半と思
く行^トけりづなとように古
石界^トうんよあられも祐のす
かく^トおとすとふくらむ
とお半^トうれとくすく

八百 や八年

庚言

あらのくらよほきみとをもせずて
おれゆよひもてば

右

辨敵

いよすみとむりうのあらくらす
きくわへ神乃あはくさきう
二年石冒れと井いさかたと

きけれともよしもきぬられと
まくとこそひややくわふえ
たまに日のよけりうまうんの
日経きたとよのあひうく
けひひりつよううつまかへる
れとうしきしきとけくふを
やくあくはせられてもまくわ
も右すとせせぬのうとされ
中よがれのうううしてく
われらひゆうん

九
萬

左緒
仲遠

仲遠

ふ早 捕 やまと の 徒 まわ り あ て

七

詩經

乞ひまほす御神のとせきわれ
ゆきくよも新枕下

十 わきりやうそつよせしと
わきりやうそつよせしと
わきりやうそつよせしと
わきりやうそつよせしと
わきりやうそつよせしと

十
考

九
指

門をあらの日教つめまへはもうと
清まみぬれゆくわれゆる

五

卷之三

りりよまとソシヒのうちよまくて
西のやまひとわれつまわる

在ちがふとうきらまくにいそ
の内もと病氣をほりふとゆき
うえげたは下て云々 なまひ半
のやうよまきうどいやう歌れん
うりよまうひてまゐる右秋月
まわりとゆりふきよまくのん
れ捕まく

十一

れわ

魏基

いくとせももうてひとこまに
まよひ多とゆきそやこめ

右

良質

二とせまてうひまよひまく
かうらねは下よ神そりく
おのねすたみよもくらむく
やくいひじにゆきとた
あもんじゆくわくへ養
てのうひまくのよまく

珍奇のあらわし

卷之三

